

## 農園

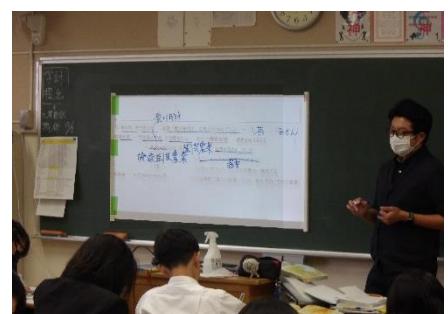
イチョウの葉が黄に染まり始めました。けやき通りの葉は、紅や黄色を通り過ぎ、茶色となって歩道に横たわっています。この時期は紅葉で赤や黄色で木々が彩られるのに、華やかになるというより冬に向かい簡素になるという雰囲気。ところが、清瀬中内ブルジョア通りでは赤や青や黄色の花々が生徒を出迎えます。これは先日、PTA 校外委員さんがパンジー・ビオラ・ストックをプランターに植栽してくれたのです。パンジー・ビオラ・ストックは花卉生産者が栽培した園芸品種ですが、技術が進歩したのか、花弁の色の種類が増えたような気がします。生産者の知恵と工夫を感じま



す。バックネット裏に目をやると緑色が派手に広がっています。ご存知、清瀬中名物ビニル袋農園です。この栽培方法の工夫に感心してしまいます。「畑がなければプランター」という認識を覆しました。大きめのビニル袋があれば栽培は可能なのです。近づいて観てみると、大根がしっかりと育ち、胚軸が地上へ突き出ています。葉は放射状に勢いを増しています。この冬も生徒たちは、技術科の授業「栽培」においてしっかりと大根を育てました。



2年生の社会は、愛知県渥美半島における農業について学んでいました。かつては不毛の大地。渥美半島は三方を海に囲まれ、水源に乏しかったため、農業用水の確保が困難であり、かつ、強い酸性土壌が広がり、育てられる作物が限られていました。豊川用水が整備され、“施設園芸農業”が発達し、今や100種に迫る農作物が栽培され品数に厚みが出ています。施設園芸農業とは、ビニルハウスやガラス温室による栽培を行うこと



で、冬場はボイラーによって室温を管理します。また、半透明ガラスを利用し、光を柔らかく拡散させて作物に均一に光を届け、収穫高を上げます。栽培の施設化により、収穫時期の競合を避け、安定供給と品質向上を実現し、その上、メロンやトマト、電照菊といった収益性の高い農作物や花卉の栽培が可能となりました。農業産出額が全国2位(R5)を誇る大規模産地であり、数千の農家や農園が存在します。

(清瀬中農園より少し大規模??) 渥美半島の農園は人々の知恵と工夫で発展してきました。現在は低炭素園芸を謳い、太陽光発電やLED照明、家畜排泄物再利用を進めています。また、AIを導入し、スマート農業への展開、サイバー移行で収益の効率化を目指します。

清瀬農園は卒業式前に、PTAさんと生徒が共にプランターの花を植えていきます。先輩を送り出す準備です。毎年繰り返され継承してきたことです。ところが、渥美半島の農園は、高齢化が進み、繰り返し継承の危機です。全国的な傾向と同じく後継者不足の解消が最たる課題です。行政や愛知県立渥美農業高校がこの課題解決に積極的に取り組んでいます。農園の減少は、生産量の低下につながります。やがて、食物自給率低下へと。自給率向上は国民全体の課題です。皆で応援していきましょう。

NO end!! 全国に誇る農園が終わりをむかえてはなりません。